

礼拝の意味論 — 『ヨハネ黙示録』を手がかりに—

村 上 良 夫 *

The Meaning of Worship: — Some Observations Based upon John's Apocalypse —

Yoshio Murakami *

Received October 31, 2006

Abstract

Recently there has been a marked shift in the understanding of John's Apocalypse; that is, a shift from "persecution literature" to "anti-assimilation literature." Along with this shift, not a few scholars maintain that the central theme of the Apocalypse is not prophecy or eschatology but "worship."

In the Apocalypse the themes of creation, redemption and the final triumphant reign of God are described as the basis of the true worship of the true God. Moreover, the problem of theodicy is clearly answered.

In this matter of worship, the prostration is important, because the guilt of Babylon lies in the fact that she glorified herself rather than God.

Coming out of Babylon, breaking her "magic," and casting one's crown before the throne, man should worship God because He is God.

The Apocalypse is a call for true worship against the various false worship in this age of Babylonian value system, culture and society.

I. はじめに

「比較宗教論」という科目を担当して10年ほどになる。仏教、キリスト教と進んできてイスラームに入ると、学生からこんな質問を受けることがある。「イスラームの人たち、一日に5回も何をお願いしてるんですか?」と。

一日5回、メッカに向かつての“礼拝”を、ちょうどわれわれ日本人の、初詣や七五三、あ

* 未来創造学部
School of Future Learning

るいは受験シーズンの神社での合格祈願などと同じように考えているわけである。

しかし“礼拝”は、“祈願”とは異なる。ユダヤ教・キリスト教・イスラームの“礼拝”は、ひょっとしてわれわれ日本人にとってもっとも分かりにくいものの一つではなからうか。そのところを、新約聖書の『ヨハネの黙示録』を手がかりに、考察してみたい。

Ⅱ. ヨハネ黙示録の主題

『ヨハネの黙示録』は、危機の時代に書かれた激励文書である、とするのが従来の一般的な見方であった。

執筆年代は紀元96年頃。古代ローマ帝国において、自らを「主にして神」と称したドミティアヌス帝の治世末期。皇帝礼拝が厳しく強制されるようになり、殉教者も出はじめていた。そうした迫害のもと、困難に直面したキリスト教徒の中には妥協に走る者たちもあり、まさしく内憂外患の状況にあった。そのような危機の時代の小アジアのキリスト教徒たちにあてて書かれたもの、とされてきたのである⁽¹⁾。

ところが近年は、この見方に修正を加えるのが通例となってきた。簡単に言えば、それほどひどい迫害の時代ではなかったというのである。ドミティアヌスは決してネロのような残虐非道な悪帝ではなかった。同時代人たちはこぞって彼をたたえている。次の時代の著述家たちが、新しい治世を賛美せんがために、ことさら前帝を悪し様に評しているにすぎない。ドミティアヌス自身は、決して皇帝礼拝を強制していないし、「主にして神」と自らを呼ばせたりもしていない。小アジアで迫害が取り分けひどかったという確たる証拠もない。史料に見るかぎり、社会的危機の激化という兆候はない、とするのである。つまり、黙示録は確かに、迫害や危機を思わせる強烈な表現をとってはいるものの、それらは現実を反映したものではなく、あくまで比喩的象徴的“表現”であって、当時の史料を見るかぎり、迫害に苦しむ教会への激励の文書とするのはあたらな、というのが近年の有力な見解なのである⁽²⁾。

ただし、これにももちろん再反論がある。同時代の人間が、自分の時代の皇帝をほめそやすのは当然ではないか、むしろ次の時代の人間のほうが、自由に客観的に批判できる、柔軟にコントロールできる中央（ローマ）よりも地方（小アジア）のほうが、皇帝礼拝がかなり先走って押し付けられるという傾向が実際にあったことは確かである、またドミティアヌス帝の時代の貨幣のデザイン等を見ても、前の時代より皇帝をいっそう神格化する動きがあったことは明らかである、……等々⁽³⁾。

さて、それではどちらが正しいのか。おそらく、両者の中間であろう⁽⁴⁾。すなわち、従来強調されてきたようなドミティアヌス帝による皇帝礼拝の強制とそれに基づく激しい迫害というのは歴史的正確さを欠くが、さりとて種々の社会的圧力が全くなかったというのもあたらない。要するに、単に迫害時の激励文書とのみ見るのは不適切であろうというのが現段階でのほぼ共通理解と考えられる。

しかし、問題はここからである。単なる迫害時の激励文書でないのなら、いったい何が主要な目的だったのか。

Charles H. Talbertは、黙示録が書かれた目的として3つの見解を紹介する⁽⁵⁾。①従来の

“persecution literature”，迫害時の激励文書として書かれたとする見方。②Adela Yarbro Collins が打ち出した心理学的見方，すなわち，直接的な迫害はなかったとしても，異教社会で受けていた種々の社会的心理的圧迫に対する一種のカタルシスとしての文書，いわば“therapeutic literature”，いやしの文書とする見方⁽⁶⁾。③異教の文化と社会のただ中であって，それに同調するな妥協するな迎合するなという警告の文書，“anti-assimilation literature”とする見方。Talbert 自身はこのうち③の見方に立ち，次のように述べる。

2つの王国の価値観は，互いに相容れぬものとして提示される。キリスト教徒の選択は“あれもこれも”ではなく，“あれかこれか”でなければならぬ。このメッセージは，預言者の時代状況に酷似したわれわれの時代に，信仰面から見てそのままあてはまる⁽⁷⁾。
黙示録は，相容れない価値観を有する文化に同化しようとするキリスト者にとって，解毒剤としての役割を果たすものである⁽⁸⁾。

Wilfrid J. Harrington などこうした立場を取るが⁽⁹⁾，激しい迫害という危機的状況が該当しないとすれば，この見方は確かに説得力を持つ。黙示録には警告的な言辞がきわめて多く，それも，「あれかこれか」の選択・決断を迫るものが一貫して目立つからである。そして，しかもこの警告は実は，何を拝むか，誰を拝むか，どちらを拝むかという，「礼拝」をめぐるものとして立ち現れてくる。

Ⅲ．黙示録の礼拝論

黙示録は戦いの書と言われる。至るところに戦い，争いが登場するからである。しかしよく見れば，それは実は“礼拝”をめぐる戦いであることに気づく。神（と小羊）を拝むか，それとも悪魔（龍，獣，偶像）を拝むか（4，5，7，9，11，13-22章に，つまりほぼすべての章に，直接，礼拝や賛美にかかわる場面が描かれている）。“礼拝”が黙示録を貫く中心的なテーマであることはすでに多くの研究者たちが認めるところとなってきたが⁽¹⁰⁾，ここでは特に，黙示録における“礼拝”の特質を考察してみたい。それはわれわれが最後に検討する“礼拝の本質”に，何らかの手がかりを提供するものとなるはずである。

1．絶対者

一般的に考えれば，礼拝とは要するに拝むことである。言い換えると，崇敬の念をあらわすことであり賛美することである。何を，あるいは誰を，なぜ拝むのか。

黙示録は単刀直入，絶対者なる神を拝めと告げる。なぜか。神は創造主だからである（「主よ，私たちの神よ，あなたこそ，栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ，御心によって万物は存在し，また創造されたからです」[4:11。以下，特に注記のない限り，すべて新共同訳による]；「神を畏れ，その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地，海と水の源を創造した方を礼拝しなさい」[14:7]；「見よ，私は万物を新しくする」[21:5]）。造られた者，被造物たる人間が創造主を拝むのは当然だと黙示録は告げる。創造主は万物を作り，支配する。そして，重要なことは，悪の勢力もまた神の支配下に

あるという事実である（猛威を振るうかに見える悪の勢力に関して添えられている「与えられた」[6:4,8;9:3]、「許された」[9:5;13:7,15,etc.]等の表現が、究極的支配者としての神を示唆している）⁽¹¹⁾。

この神はまた、永遠の存在でもある（「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」[1:4]；「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる、『わたしはアルファであり、オメガである』」[1:8]；「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方」[4:8]；「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」[22:13]）。時間を超越した永遠の存在者、これが神である。

人は神を拝む、神は永遠の創造主・全能の支配者であるだけでなく、さらに、救い主・贖い主でもあるからである（「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、……栄光と力が限りなくありますように」[1:5]；「あなたは、屠られて、……御自分の血で、神のために人々を贖われ」[5:9]；「屠られた小羊は、……誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい」[5:12]）。

創造と救済ゆえに、人は神を拝む。神を神として礼拝するのである。神を拝むとき、人はどうするのか。ひれ伏すのである。それも自分の冠を投げ捨てて（「二十四人の長老は、玉座についておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出した言った。『主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方』」[4:10,11]；「四つの生き物と二十四人の長老は……小羊の前にひれ伏した」[5:8]；「長老たちはひれ伏して礼拝した」[5:14,11:16]；「聖なる方は、あなただけ。すべての国民が、来て、あなたの前にひれ伏すでしょう」[15:4]。なお、天使たちもひれ伏して神を礼拝している。7:11,12参照）。

この、「ひれ伏す」行為は重要である⁽¹²⁾。なぜなら、黙示録後半で裁かれる「バビロン」の罪は、その「おごり高ぶって」いることにあるからである。神礼拝でなく自己礼拝だからである。ここでわれわれは旧約聖書『ダニエル書』4章の、ネブカドネツアル王の経験を想起してよいであろう。高ぶりゆえの罪と、7年後のゆるしと神礼拝への立ち返りを。

人は、誇り（「冠」）を捨てて、神の前にひれ伏さねばならない。これが礼拝だと黙示録は告げる。ムスリムの、一日5回のあのひれ伏しての礼拝。あれが絶対者に対して人が本来取るべき姿だと黙示録は告げる。かなり自由な態度で祈りをささげる現代のクリスチャンたちより、ムスリムのほうがその精神において聖書的であるといったら言い過ぎであろうか。

2. 礼拝と終末

終末とは何か。世の終わり、歴史の終末。実は、神の神たることが明らかになるのが終末だとも言えるのではないか。そのとき、誰が真の支配者かが明らかになり、悪が裁かれ、善が報われる。かくて神が、神として、正当に礼拝される。まさしく終末と礼拝は切り離すことができない。終末の書とされる黙示録が礼拝の書でもあることは、けだし当然であろう。

創造の主は、いや、創造の主だけが、終末をもたらすことができる。したがって、終末の巻物が開かれて「封印・ラッパ・鉢」と終末の諸事件が繰り広げられる直前に、まず天上での

「礼拝」が描写され（4章5章）、また遂に悪の象徴「バビロン」が滅ぼされる時にも天の「賛美・礼拝」が示され（19:1-8）、さらに、最終的に悪が裁かれたあとに新天新地での「礼拝」が描かれる（21章、22章、特に22:3,4参照）のも、当然なのである。終末の書は礼拝の書である。この意味で、Paul J. Achtemeierが、礼拝を描いている5章と21章以下とが、黙示録のクライマックスだと指摘しているのは正鵠を射ている⁽¹³⁾。黙示録の中心は、中間部分のおどろおどろしい災いの描写ではなく、礼拝部分にこそあるからである。

まことに、終末と礼拝は密接不離に絡みあっている⁽¹⁴⁾。誰を拝むのか、なぜ拝むのか、具体的に述べられ明らかにされるのが終末だからである。

ところで、もう一つ重要な点がある。それは「礼拝という行為は、やがて来たらんとする終末を、今、リハーサルする」ものだという事実である⁽¹⁵⁾。終末時には、誰が神かが明らかになり、悪は裁かれ善が報われる。それを先取りして、すでに今、神を賛美するのが「礼拝」という行為なのである。換言すれば、終末を知る者だけが、いや、終末を信じる者だけが、真の意味で礼拝を捧げることができる。礼拝において、終末がそこに来ている。終末の現臨が礼拝なのである。神が賛美され神にのみ栄光が帰せられる。それが誰の目にも明らかになるのが終末であるが、それをすでに見越して、それをすでに信仰の眼で見て、すでに今ここで賛美するのが「礼拝」だと言っているのである。すなわち、礼拝は終末的行為である。

ある説教者は黙示録19章4節の「アーメン、ハレルヤ」に注目する⁽¹⁶⁾。そしてこの二つの言葉こそ、礼拝の本質だと主張する。今現在の状況に対して、つまり、今表されている神の意志に対して「アーメン」(ἀμήν 然り、まことに、確かに、の意)、然り、あなたのなさることはすべて正しいと受け入れ、同時に、終末にはすべてが明らかにされることを確信し、将来を見越して神を賛美する、「ハレルヤ！」(ἁλληλουϊά 主を讃美せよ、の意)と。これは深く、示唆に富む捉え方だといわねばならない。終末的観点から現在を受けとめ、すべてが神の支配下にあることを受け入れて「アーメン」と唱え、神の国（＝神の支配）が実現するその時を見越して「ハレルヤ」と叫ぶのである。それが「礼拝」だと黙示録は告げる⁽¹⁷⁾。

3. 礼拝と神義論

礼拝は神義論とかわってくる。現に悪が跳梁跋扈しているのに、正直者や弱者が痛めつけられ権力者や不心得者が甘い汁を吸っているのに、それでも神を礼拝せねばならないのか。神はどこにいるのか、「旅にでも出ているのか。……眠っていて、起してもらわねばならない」(列王記上18:27)のか、それとも無力なのか。

David A. de Silvaは、黙示録を取り巻く社会状況を分析した論考の中で、神義論は黙示録の本質的要素ではないと主張する。信仰者に対する抑圧は何故かというような問題ではなくて、種々の圧力に屈することなく本来の信仰を保てという呼びかけと見るのである⁽¹⁸⁾。しかしこの見方には賛成できない。黙示録にはやはり、悪の問題に対する「回答」があるからであり、また礼拝・賛美は悪の問題と関連して描かれているからである。具体的に見てみよう。

善が悪に苦しめられる、なぜそのようなことが起きるのか。神はどこにいるのか。全知全能にして善なるはずの神が、なぜ何もしないのか。こうしたまさしく「神義論」的な問いに対して、黙示録は少なくとも3つの「回答」を与える。一つ。先ほども触れたが、悪もまた神の支配のもとにあり、神の「許可」のもとに勢威をほしいままにしているということ。神が、何ら

かの意図あって、善への攻撃を許していると説くのである。神は決して無関心でもなければ放置しているのでもなく、無力でもない。すべては神の計画のうちにある、神の掌の中にあると説明するのである⁽¹⁹⁾。二つ。善と悪の戦いが、宇宙的スケールの中に位置づけられている⁽²⁰⁾。信仰者の、どんな小さな戦いも、実は人類の全歴史を貫く全宇宙的な善と悪の斗争闘の一部を成している。お前だけの問題ではない。途方もなく巨大な戦場の、その中にお前がいるのだと告げる。自分たちの苦難が、より大きな構図の中に位置づけられること、これは一つの効果的な「回答」と言わねばならない⁽²¹⁾。三つ。悪の勢力がどんなに隆盛を誇るかに見えても、結局は裁かれ滅ぼされる。最終的な勝利はやはり善の側にある。これは黙示録の、特に後半部分において、何度も繰り返されるメッセージである。今だけを見るな、最終場面を見よ。究極の勝利者は神と小羊に従う者たちだ、と。

以上見たように、黙示録は明らかに神義論への回答を提示していると言える。そしてこれはそのまま礼拝と結びついてくる。目の前に見える不正義・不条理にもかかわらず、人は神を礼拝する。人間的には不正義・不条理に見えても、より大きな視野からは、それらは神の壮大な計画の一環であり、歴史を貫く宇宙的な戦いの一部であり、そして究極的な解決と勝利が保証されているからである。

J. P. M. Sweet の指摘は正しい⁽²²⁾。混乱と戦いと殺戮の部分（6－20章）は、創造主・救い主への礼拝（4－5章）とその神による新しい世界（21－22章）によって、いわば括弧に入れられている。すべては神の計画のうちであり、神の最終目的の成就へと導かれていると、黙示録は告げている。

神学者ブルトマンは黙示録に基づくある説教の中で、「『眼に見えるこの世が世界のすべてではない』……わたしたちが住んでいるこの世界には隠れた背景があるのに、その背景を忘れてるのが私たちの常であります」⁽²³⁾と語る。黙示録はこの「背景」に気づかせてくれる。そして目を上げて神を礼拝せよと告げるのである⁽²⁴⁾。

4. 礼拝と生活

神を神とするのが礼拝であるなら、そうさせないものがある。人を神礼拝からそらすものがある。それに対する警告が黙示録には繰り返す述べられる。「バラムの教え」(2:14)；「ニコライ派の教え」(2:15)；にせの「預言者」(2:20)；「竜」や「獣」，「獣の像」への礼拝（13－14章）；「バビロン」(16－18章)等々、これらすべてが、人をまことの神礼拝からそらすものとして指摘されている。さらに、語句的にもモチーフ的にも「出エジプト」の出来事が黙示録の底流にあることはつとに定説となっている⁽²⁵⁾。また、黙示録においては「富」の問題が大きく比重を占めていると見られることも、多くの注解者たちが注目しているところである⁽²⁶⁾。

さて、これらすべてをまとめて、それらは「魔術」(18:23。φαρμακεία [まじない、魔法、魔術]) だと言えないであろうか。黙示録は、われわれをいつのまにか捉えているこの「魔術」からの覚醒を訴えているのではなかろうか。魔術から目を覚まして、真の神礼拝へと立ち返れというのが、黙示録の中心的メッセージなのではないか。

バビロンはローマを指すと一般に解されている⁽²⁷⁾。権力、富、栄光、これらすべてを兼ね備えて栄華を誇るバビロン（ローマ）。永遠に続くかに思われるローマ帝国の繁栄。だがしかし、これらはすべて「魔術」にすぎないと黙示録は告げる。お前たちは魔法にかけられている。

「まじないでだまされ」ている（18:23. 口語訳）。すべては幻影にしかすぎない。永遠どころか「一日のうちに」（18:8）、いや「一瞬にして」（18:10,17,19. 口語訳）裁かれ、滅び去ってしまう。その事実に気づかせないのが「魔術」なのだ。バビロンのものから離れ去れ。

それでは、バビロンのものとは何か。神ならざるものを神とし、富ならざるものを富とし、頼りにならないものを頼りとする、そうした人間の自己中心的自己崇拜的な考え方・生き方・文化の総体と言えよう⁽²⁸⁾。そのバビロンから「離れ去れ」（18:4）と黙示録は訴える。これはまた、一種の「出エジプト」でもある⁽²⁹⁾。基本的には出エジプトは、苦役からの救出・解放というより、神礼拝の問題であった（「荒れ野に行かせて、わたしたちの神、主に犠牲をささげさせてください」出エジプト記3:9、「わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい」同5:1）。それに対してファラオは「主とはいったい何者なのか。……わたしは主を知らない……」と答えている（同5:2）。神を無視し神を拝まぬエジプト＝バビロンの「魔術」から目を覚ませ、エジプトより出でよバビロンより離れ去れ。神を礼拝するには神ならざるものを拝むことをやめねばならない。力、富、栄光、“自分”を拝むことをやめよ。すべては「魔法」にすぎず、その背後には「サタン」がいるのだから⁽³⁰⁾。

かくて現代の研究者たちには、黙示録のメッセージは、神に敵対する文化への同化・妥協をやめて真の神を礼拝せよ、という呼びかけだとする論調が目立つ⁽³¹⁾。言い換えるなら、黙示録で取り上げられているのは、迫害という試練ではなく、幻惑という試練なのである。

聖書の解釈は時代を反映する。現代はまさに、魔法にかけられた時代であり、黙示録はわれわれにそれからの脱出・解放を呼びかけ、目を覚まして神を礼拝せよと訴えている、と見ることができる。われわれは、いつのまにか、「魔法の国」にいるのではないか。「魔法」にかけられ、「まじない」にだまされて幻の世界に住んでいるのではないか。大量生産と大量販売、大量消費、そのための大量宣伝。テレビ、DVD、ゲーム、インターネット、ケータイ等々、ヴァーチャルな世界のほうに重心が移り、本当に生きているのかいないのか、現実と虚構、生と死、いや善と悪の境い目すらばやけてきてしまった。モノと情報とイメージが氾濫し、その中で溺れかけているのがわれわれ現代人なのではないか。

そうした中で、黙示録は、目を覚まして、もう一つの世界、幻影ではない真の現実世界に目を向けよと告げる。神を神として拝め。いたるところに見られる小さな「獣」や「像」に惑わされ、それらを拝むのでなく、ただ「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。……天と地と海と水の源とを造られた方を、伏し拝め」（14:7. 口語訳）と「大声で」呼びかける。

礼拝とは、別の世界に移ることではないか。獣や像が支配するこの世ではなく、もう一つの、もっと大きな、そして永遠とつながる、神が神とされる世界に住むことではないか⁽³²⁾。黙示録は、礼拝への招きであると同時に、日常的な生き方の変革を迫る書だと思われてならないのである⁽³³⁾。

以上、いくつかの観点から、黙示録における“礼拝”の特徴ないし意味づけを考察してきた。これらを踏まえて、それではそもそも、“礼拝”というものを根本的にどう考えたらいいのか、何が礼拝の本質なのか、それを検討してみたい。

IV 礼拝の本質

礼拝とは祈り求めることではない。ひれ伏して拝むことである。なぜ、ひれ伏して拝むのか。神は神だからである。もちろん、先に見たとおり、神は創造主にして救い主、絶対的支配者であるが、しかし、そうした理由を事細かに挙げていけばいくほど、逆に礼拝の本質が薄れていくようにも思われる。

われわれの感覚を鈍らせている、さまざまな迷妄（「魔法」!）の霧を払いのけ、ただ、神は神であるがゆえに、礼拝されねばならない。人は人であるがゆえに、ひれ伏して神を拝まねばならない。それが礼拝の本質なのではないか⁽³⁴⁾。

イスラームの礼拝を見てみよう。むしろイスラームのほうが、単純明快に礼拝の核心を衝いていると言えるかもしれない。『クルアーン』（コーラン）20章14節には端的にこう記されている――

本当にわれはアッラーである。われの外に神はない。だからわれに仕え、われを心に抱いて礼拝の務めを守れ⁽³⁵⁾。

フランスのイスラーム学者による、世界中で広く読まれている『イスラーム概説』には、礼拝はこう説明されている――

「礼拝は宗教の柱である」、とは預言者ムハンマドの言葉である。……

地上に神の勢威の及んでいることを感得するために、イスラームは毎日五回の礼拝を規定している。……礼拝に費やす数分の間は、われわれの創造者である神に対する帰依と感謝の証として、あらゆる物質的関心を放棄しなければならない⁽³⁶⁾。

「あらゆる物質的関心を放棄」とは、黙示録が言うところの、バビロンの魔術からの解放とも呼応するように思われる。サウジアラビアのイスラーム学者も、イスラームの手引書の中でこう述べる――

アラーへの毎日の祈りがなければ、やはりアラーへの信仰は次第に弱まるものと考えられる。日頃、人々の生活にはさまざまな誘惑がつきまとう。金銭欲、うまい商売の話、セックス等々。信者たちが礼拝をしなければこれらの誘惑に負けてしまうであろう。祈りを通じアラーの存在を常に意識し、アラーの命令、アラーの報い、そして現世に続く来世の存在等を再認識する⁽³⁷⁾。

日本人ムスリムの代表格であった人物による『イスラーム入門』は、現在もよく読まれているが、その中で「礼拝」は次のように説かれている――

サラート〔礼拝〕は、宇宙万物の創造者、養育の主への服従であり、賛仰であって、他

の宗教にみるような、自己の願望の祈願や、現世利益への祈祷とは、根本的に異なる意志の表現であります。われわれの肉体を含めた天地自然の、厳然たる秩序と美観に対する驚嘆と賛美がおのずから礼拝の姿となるものであります。……

アッラーの偉大さを前に、全能なる権威のまえに、そして広大無辺なる仁愛のみ手のうちに、純真な魂が感応する時に、おのずから頭を下げ、み前にひれ伏すのであります。礼拝によってのみ、ムスリムはアッラーの導きと恩恵にあずかることが許されるのであります⁽³⁸⁾。

神は神であるがゆえに、礼拝されねばならない。人は人であるがゆえに、伏し拝まねばならない。ところが現代は、人類文明があまりにも高みに昇りつめたために、人は自らを、また自らが作り上げたものを、拝むようになってしまった。「魔法」のかかった、傲慢^{ヒュブリス}の世界にいて、神を神とすることを忘れていて。それに対する警告が、前にも触れたとおり、ヨハネ黙示録のメッセージだと受けとることができるのである。もともと聖書は、種々の読み方・解釈を許容するものであるが、現代は確かに、こうした解釈が十分にあてはまるであろう。

その「礼拝」を、余計な理由付けは抜きにして、意識的かつ可能な限り集団的に実践しているのがムスリムたちだと言えるかもしれない。黙示録にしろイスラームにしろ、宗教にこだわらぬ融通無碍なわれわれ日本人には縁遠く、理解しにくいことであるが、しかしそれだからこそいっそう、こうした点に関する正しい理解と認識が求められていると思われるのである。

V おわりに

グローバル時代に真に必要なのは、実は「ひれ伏す心」ではなかろうか。絶対的な存在の前に、自らを低くし、畏敬と感謝と讃美をささげる。信じる対象は異なっても、ひれ伏す姿勢が身についているなら、他者の拝むものを相互に尊重することは当然であり、「仏像冒瀆ポスター問題」⁽³⁹⁾や「ムハンマド風刺画問題」⁽⁴⁰⁾等は起きてこないのではないか。

ひるがえって日本を省みると、一神教ではなく八百万の、典型的な多神教徒であったかつての日本人には、一神教的絶対者はおらずとも、この「ひれ伏す心」が備わっていたように思われてならない。「お天道様が見ておられる」と子どもに教え、神棚・仏壇に頭を垂れて合掌し、「いただきます」「ごちそうさま」「おかげさまで」と繰り返す、日々の淡々とした生活の中で、おのずから「礼拝」が実践されてきたのではないか。

今、われわれは何を「神」として重んじているのか。拝むべき「神」を持っているのか。黙示録を読み、イスラームを見、かつての日本人を振り返りつつ、改めて考えさせられるのである。

註

- (1) 典型的なものを一つ紹介しておく：「本書『ヨハネの黙示録』が書かれた主たる目的は、迫害下にある教会に対して、さらに今後加重されると予測される迫害について、キリストと彼を信じる者たちの最後の勝利を確約して、慰めと励ましを得させることにある。同時に、とすれば教会が陥ろうとする教理上・経験上のあやまちを指摘して、警告することも本書を必要とした理由である」(ラルフ・アール、小出忍訳『ヨハネの黙示録』[エブワース聖書注解⑫。福音文書刊行会、1982年]、

- 12頁)。
- (2) Leonard L. Thompson, *The Book of Revelation: Apocalypse and Empire* (Oxford Univ. Press, 1990) がその代表である。特に95-115頁参照。なお, Adela Yarbro Collins, *Crisis and Catharsis: The Power of the Apocalypse* (Philadelphia: Westminster Press, 1984) やWilfrid J. Harrington, *Revelation* (Sacra Pagina Series, v. 16. Collegeville, MN: Liturgical Press, 1993) も同様の立場に立つ。
 - (3) G. K. Beale, *The Book of Revelation: A Commentary on the Greek Text* (Grand Rapids, MI: William B. Eerdmans Pub. Co., 1999), 4ff.や, Kenneth StrandによるThompsonの書の“Book Review” (*Andrews University Seminary Studies* 29 [1991] 188-90) 参照。
 - (4) “The truth lies somewhere in between the recent historical revisions concerning Domitian (Thompson and others) and more traditional assessments of Domitian, since all the ancient testimonies both for and against Domitian contain varying degrees of bias and truth” とBealeが評するとおりであろう (Beale, 6)。
 - (5) Charles H. Talbert, *The Apocalypse: A Reading of the Revelation of John* (Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 1994), 9-12.
 - (6) Collins, *Crisis and Catharsis*. なお, Adela Yarbro Collins, “Reading the Book of Revelation in the Twentieth Century,” *Interpretation* 40 (1986): 240-42 も参照。
 - (7) Talbert, 12.
 - (8) Ibid., 111.
 - (9) Harrington, 9-14.
 - (10) David L. Barr, “The Apocalypse of John as Oral Enactment,” *Interpretation* 40 (1986): 255-56; Richard Bauckham, *The Theology of the Book of Revelation* (Cambridge Univ. Press, 1993), 121; Harrington, 10; Thompson, 53-73; Grant R. Osborne, *Revelation* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2002), 46-49.
 - (11) Harrington, 25.
 - (12) Josephine Massyngebaerde Ford, “The Christological Function of the Hymns in the Apocalypse of John,” *Andrews University Seminary Studies* 36 (1998): 220.
 - (13) Paul J. Achtemeier, “Expository Articles: Revelation 5:1-14,” *Interpretation* 40 (1986): 283.
 - (14) Vernon H. Kooy, “The Apocalypse and Worship—Some Preliminary Observations,” *Reformed Review* 30 (1977): 198ff.; Thompson, 68-69.
 - (15) Eugene H. Peterson, *Reversed Thunder: The Revelation of John and the Praying Imagination* (Harper San Francisco, 1988), 70.
 - (16) Norman Nelson, “The Meaning of Worship” (Radio Program, “The Morning Chapel Hour,” May 18, 1993) .
 - (17) Barr, “The Apocalypse of John as Oral Enactment,” 255-56. なお, ここで一つのエピソードを紹介しておきたい。1968年, ロバート・ケネディ上院議員が暗殺され, セント・パトリック教会で葬儀が執り行われた際, ヘンデルの『メサイヤ』の「ハレルヤ・コーラス」が会衆一同で歌われたという (Herb Varder Lugt, “God Reigns,” *Our Daily Bread* [June 16, 2006])。 「ハレルヤ・コーラス」の歌詞は, 黙示録19:6, 11:15, 19:16から取られている (「ハレルヤ, 全能者であり, わたしたちの神である主が王となられた。ハレルヤ。この世の国は我らの主と, そのメシアのものとなった。主は世々限りなく統治される。ハレルヤ。『王の王, 主の主』, 主は世々限りなく統治される。ハレルヤ。)。暗殺という悲劇にもかかわらず, すべては神の支配下にあり, あらゆる出来事を通し, またそれらを乗り越えて, 神はご自分の目的を成就される, という終末的信仰を, ここにも垣間見ることができるであろう。
 - (18) David A. de Silva, “The Social Setting of the Revelation of John: Conflicts Within, Fears Without,” *Westminster Theological Journal* 54 (1992): 299, 301.
 - (19) 一つの典型は6章である。封印が開かれ, 戦いや混乱の絵図が展開していくが, それらすべては「[神によって] 与えられた」と述べられる。そして特に, 殉教者たちの, 「真実で聖なる主よ, いっまで裁きを行わず, 地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか」(10節) というまさに神義論的訴えに対し, 「その一人一人に白い衣が与えられ, また自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり, 仲間の僕である者たちの数が満ちるまで, なお, しばらく静かに待つようにと告げられた」(11節)。殉教者たちは, 一人一人, まちがいに神に覚えられ, しかも, さらに殉教者たちが増えることになっていて, その数も定められている, というのである。苦難も殉教も, すべて神の計画のうちにあり, 絵画的表現をもって黙示録は説く。
 - (20) Collins, *Crisis and Catharsis*, 161. なお, George Ladd, “The Theology of the Apocalypse,” *The Gordon Review* 7 (1963/64): 76-77参照。
 - (21) この全宇宙的全歴史的構図は, 特に12章に顕著である。天での戦い, 竜と, 女が産んだ男の子との対立, 地上での戦い, 等々が視覚的絵画的に表現されている。なおLadd, 76-77参照。

- (22) J. P. M. Sweet, *Revelation* (Philadelphia: The Westminster Press, 1979), 47. なお, David L. Barr, “The Apocalypse as a Symbolic Transformation of the World: A Literary Analysis,” *Interpretation* 38 (1984): 49-50を参照。
- (23) ルドルフ・ブルトマン, 松本武三訳『知られざる神に——マールブルク説教集』(みすず書房, 1980年), 182頁。
- (24) 「黙示録は、物ごとが見かけとは違うことをわたしたちに教えるものである」とヘンドリクセンは指摘する。悪が勝利する「かのように見える」が、実は「キリストこそ勝利者なのである。その結果、私たちもまた勝利者なのである。たとえわたしたちが絶望的な敗北を喫するように思われることがあっても、である」(ウィリアム・ヘンドリクセン, 森田勝美・今井正共訳『ヨハネ黙示録講解——勝ち得て余りあり』(聖恵授産所出版部, 1983年), 9-10頁。
- (25) Kooy, 207; Sweet, 34; Bauckham, 100.
- (26) Peterson, 147; Collins, *Crisis and Catharsis*, 94ff.; 295.
- (27) そしてまた, 神に敵対する勢力一般を指すとも解釈できる。Ford, 226参照。
- (28) Beale, 921-22参照。Cairdも注解書の中で次のように指摘する: “Babylon’s **sorcery** had bewitched all nations into a false sense of security, leading them to believe that Rome was the eternal city.” (G.B.Caird, *A Commentary of the Revelation of St. John the Divine* [NY: Harper & Row, 1966], 231)
- (29) Bauckham, 100; Kooy, 207.
- (30) Ladd, 76-77; Barr, “Oral Enactment,” 255.
- (31) Barr, “Oral Enactment,” 255-56; Talbert, 111; de Silva, 302.
- (32) 「いかにしばしば、わたしたちはその音に気づかないでいます。すでに永遠をこの人生に引き込んで、己れの意のままになしうろと思いがっているからであります」[「黙示録の言葉は」日常生活に埋もれているわたしたちに対して、別の世界からの言葉として語りかけます」(ブルトマン, 前掲書, 188, 191頁)。
- (33) Barr, “Symbolic Transformation,” 44-50, “Oral Enactment,” 256; Beale, 29, 33; Collins, “Reading,” 242; de Silva, 302; Robert H. Smith, “‘Worthy is the Lamb’ and Other Songs of Revelation,” *Currents in Theology and Mission* 25 (1998): 506. なお, この意味で, 黙示録の著者ヨハネはまさしく「預言者」と言わねばならない。マックス・ヴェーバーのいわゆる「倫理預言」(使命預言)、生き方の変革を迫る言葉を, 真正面から告げているからである。ウェーバー, 林武訳『「世界宗教の経済倫理」序説——比較宗教社会学的試論』(『世界の大思想Ⅱ-7・ウェーバー宗教・社会論集』河出書房, 1968年) 135頁; Max Weber, *The Sociology of Religion*, trans. Ephraim Fischhoff, (Boston: Beacon Press, 1964) の Talcott Parsonsによる “Introduction” (p. xxxv) 等参照。
- (34) かつて船水衛司氏は, ヨブ記の真の主題は礼拝であると喝破された(「ヨブは波動的に彼を襲った耐え難い試練・苦難・神と人生への疑惑との死闘の果てに、『神は神であるということの故にのみ礼拝されねばならぬ』と答えた。……ヨブにとって神は, 義人を恵み, 悪人を罰するゆえに神なのではない。神は義人を苦しめ, 悪人を幸せにしても神なのである。この神を, 人生の禍福を越えて, ひたすらに礼拝すること。これが真実の礼拝であり, これを証示するところにヨブ記の真の主題がある」(手塚儀一郎他編『旧約聖書略解』[日本基督教団出版局, 1957年], 489頁)。ある意味で, 聖書各巻の主題は, いや聖書全体の主題が, 人をして神を“礼拝”させることにある, と言えるであろう。竹森満佐一氏の, 小冊子ながら名著とされる『礼拝——その意味と守り方』(東京神学大学出版委員会, 1972年)の一節を引いておきたい: 「ほんとうに神を信じるとは, どういうことでしょう。それは, 神をまことに神とすることです。そのために, 自分の立場が全く神に服従させられたものになり, しかも, それを喜ぶことです」, 言い換えるなら, 「神は, これを拝むようにならないければ, 信じたことにはならないのであります」(4, 6頁)。
- (35) 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』(日本ムスリム協会, 1982年)。
- (36) ハミード＝ラー, 黒田美代子訳『イスラーム概説』(イスラミックセンター・ジャパン, 1983年), 94頁。
- (37) ムハンマド・アリ・アルクワリ, 武田正明訳『イスラムとは何か』(時事通信社, 1985年), 61頁。
- (38) 森本武夫(日本ムスリム協会監修)『イスラーム入門——その宗教の本質と教義問答』(中央大学生協同組合出版局, 1998年), 74-75頁。
- (39) 2004年9月, 仏像の頭の上にサングラスの男が座するという図柄のアメリカ映画のポスターに, 仏教国タイで激しい非難が沸き起こり, 仏教者たちがバンコクのアメリカ大使館に抗議するなどの騒ぎとなった。ポスターは作り変えられた(2004年9月17日付朝日新聞参照)。
- (40) 2005年9月, デンマーク紙に掲載されたムハンマドの風刺漫画がヨーロッパ各国でも掲載され, 2006年の特に1~2月にかけて, 世界各地でムスリムによる抗議行動が起きるといった世界的な大問題となった。2006年2月の各全国紙等参照。